

うち なお もの てん と もの てんし おのれ みなてん こ
内に直き者は天と徒たり。天と徒たる者は、天子と己と皆天の子と
ところ し しか おのれ げん もっ こ ひと よ
する所なるを知る。而るに独己の言を以て而の人のこれを善みする
もと こ ひと よ
を期め、而の人のこれを善みせざるを期めんや。然くの若き者は、人
どうじ い これ てん と
これを童子と謂う。是をこれ天と徒たりと謂う。

【大体の意味内容】

内面ないめんの世界せかい、思考しこうとか心こころとか精神せいしんとか魂たましいとかのすべての働きはたらに素直すなおなものは、天てんの仲間なかまである。天てんの仲間なかまとなった者は、天子てんしである王おうも、庶民しよみんである自分じぶんも、同じ天てんの子こである。と知っている。だから、独自の全力どくじ ぜんりよくで振り絞ふった言葉ことばを、王おうの様な権力者けんりよくしやにわざわざほめてもらいたいと期待きたいしたりはしない。逆に批判ぎやく ひはんしてほしいと期待きたいすることもない。(相手あいての地位ちいや身分みぶんが高たかくても同じ天てんの子ことして、特別視とくべつしする必要ひつようはないからだ。)このように素朴そぼくで素直すなおなものを、人ひとは「童子どうじ」と呼ぶ。これこそまさに、天てんの仲間なかま、「天徒てんと」というのである。

『莊子』のこの第四章「人間世篇」は「じんかんせいへん」と読みます。世界は時間・空間・人間じんかんで構成けんせいされているという考え方です。人と人が関係かんけいしあう社会しゃかいにおいては地位ちいや身分みぶんの階層かいそう分化ぶん化が多くおほくの社会しゃかいでなされますが、「人間じんかん」の本質ほんしつはそのような階層かいそう分化ぶん化ではないこと、すべてが「天てんの子こ」という点てんにおいて、皇帝てんていも民衆みんしゆもみな同じ存在じんざんに過ぎない。そうした人間じんかん本来ほんらいのありようを体現たいげんするのが「童子どうじ」である。

児童観じぢうかん、子ども観こどもかんを根本こんぽんから見直すべきなのです。「子ども」は未完成みけんせいな存在じんざん、教育きよくうによって大人おとなへと成長せいぢやうさせなければならぬ、その途中経過ちゆうぢうけいこにある存在じんざん、というのが常識じやうしき的な見方けんぱう考え方かんがへですが、本来ほんらいそうではなかった。

「天子」として、時間空間人間、即ち宇宙の摂理に則った始原的で、かつ究極の生命存在が「童子」であると、古人は直感していました。大人になるほど、理想の人間像からは離れ、墮落してゆくわけです。そのことを、大人はもっと謙虚に自覚すべきなのでしょう。



銅造《八大童子像》運慶作 鎌倉時代 12世紀（一部 南北朝時代 14世紀）全圖家志蒔